

❖ 東京オリンピック代表選考競技

2021年4月から6月上旬にかけて行われた東京オリンピックの代表選考も終盤。6月に開催される日馬連主催の選考競技会の1週間前に、フランスで行われた CDIO5* Compiègne に出場しました。私は Barolo と Ludwig の2頭で代表選考に臨んでいましたが、Barolo は怪我と疲労蓄積のリスクを考えて出場は控え、Ludwig のみを連れて行きました。また、ネーションズカップ（国別団体戦）には、北原広之選手と林伸伍選手とともにチームとして参加しました。

❖ CDIO5* Compiègne (フランス)

Ludwig

Ludwig は、5月上旬にオランダの CDI3* Exloo に出場後、一度トリートメントと休養を入れて、徐々にビルドアップしてきましたが、競技会前のトレーニングでうまく状態を作ることができました。競技場での前日トレーニングも調子が良く、競技会でどのような騎乗をするべきかをうまくイメージすることができました。

初日のグランプリでは、競技本番10分前の練習馬場に入ると馬はややホットになり、脚に対して反抗を見せたり、身体を強張らせてスルーすることを拒むなどのスタリオンの悪癖を見せ始めましたが、この場面こそこれまでの競技で改善にトライし続けていたことだったので、焦らず冷静に馬をスルーさせ、脚の前に馬を置いてうまく解決することができました。また、本馬場入場の際に駈歩発進で脚に反抗する様子を見せたので、それを良しとせず再度発進をやり直し、しっかりと扶助に従うことを確認して入場しました。この時点で今日のパッサージュからの駈歩発進は練習通りできると確信が持てましたが、この扶助操作の確認は今後も必ず必要だと感じました。本番では馬場は全体的にやや深く、場所によって深さが違っ

たり、グリップが良くなかったりと良いコンディションではなかったため、やや準備運動とは違った感覚でしたが、馬がよく頑張ってくれました。また、入場からの停止も速歩区間で停止・後退もようやくうまくできてミスを防ぐことができました。駈歩区間では普段よりも前が低くなる傾向にあるように感じ、ジグザグや歩歩などミスをするかもしれない心配がありました。うまく切り抜けてくれました。減点箇所となった右のピルーエットでは、後肢がやや揃い気味になったところと、中央線にスムーズに戻れずリズムが崩れたところをミスとして取られ5~6点となりました。また、最後の中央線でのパッサージュでは、馬が後肢のステップを歪まそうとしていたことからスルーしている感覚が

足りないと感じ、脚のプレッシャーが強くなり後肢がアンイーブンになってしまいました。これにより2人のジャッジからは5点、5.5点と減点されてしまいました。結果としては69%と十分満足できる成績で、トータルすると前回の競技より良い演技ができたことは収穫でしたが、競技後に映像を見ると右ピルーエット前までは70%を超えていたので、自分の詰めの甘さを感じました。

2日目は自由演技に出場しました。自由演技は、この馬にとっては規定演技よりも回りやすく、難しい移行も問題なく行えるので準備運動の時間を少し減らして調整しました。前日ミスのあったパッサージュでは、どれほどの脚扶助が必要かを確認しながらの騎乗に務めました。結果としては、やや馬を信用して脚の反応を求めつつもプレッシャーを強くしすぎないように気を付けました。自由演技の経路の構成も手伝って、その点においてはうまく対処することができました。しかし毎回思いますが、自由演技の方がパッサージュの弾発をキープしやすいため、この感覚で規定演技のパッサージュもできなければなりません。前日ミスのあった右ピルーエットについては、斜線上で行うものであっ



▲積み上げてきたものを出すことができた CDIO5* Compiègne

たので心配はしていませんでした。斜線上では中央線上ほど明確に小さく回る必要はなく、人も自信を持っている運動の一つであったのでうまく行うことができました。全体としても大きなミスはなく、ややピアツフェは前進する課題が残りますが、トレーニングで積み上げて確認してきたことを演技で出すことができました。結果は76.155%の自己ベストスコアで、CDIO5* という舞台で4位入賞することができました。

そして、何よりこの2日間の演技にはトレーナーの Imke もとても満足してくれました。普段から誰よりも親身になって指導してくれている Imke ですが、トレーニングでは妥協を許さず細部にわたってまで可能な限り完璧な状態を求められます。その要

求に応えるには、こちら
も一切の妥協をせず人も
馬もできるようになるまで
トライし続けなければなら
ない忍耐が必要でしたが、
そのおかげでここまでの
結果を出せるようになって
きました。Imkeとともに積
み上げてきたものが、この
ような大きな舞台でひとつ
の形にできたことは何より
も喜ばしいことでした。

オリンピック代表選考は、
1週間後の日馬連主催選考
競技会を経て決まります。
万全の準備とケアをして、
BaroloとLudwigの2頭で
ベストを尽くさなければなら
ません。

ネーションズカップ

ネーションズカップとは国別
のチーム戦のことで、馬場馬
術競技ではヨーロッパ内でも
そこまで多くはなく、日本が
チームとして参戦することも
ほとんどありませんでした。
参加したとしても多くの場合
は「最下位」というイメージが
ありました。

今回は、最終成績は7チーム
中6位で、ヨーロッパにある
スイスを下した結果になりま
した。当初は11チームが参加
予定でしたが、アメリカチーム
は馬ヘルペス陽性馬が出たた
め入厩前に棄権したため10チ
ームでスタート、さらにデン
マーク、オランダ、ロシアは
失権・棄権が出て途中リタイ
アしたため、競技を終えるこ
とができたのは7チームとい
う状況でした。出場10チーム
中の6位と考えれば、良い結
果で終えたと言えると思い
ます。ポジティブにとらえず
ぎていることは承知していま
すが、これは3人馬で団体を
組む東京オリンピックでも起
り得ることです。率直に言っ
て、日本が団体入賞することは
簡単ではないと感じていま
すが、全員がベストを尽くし、
さらに今



▲76%という結果にチーム皆が喜んでくれた

回のように周りが脱落した場
合には入賞の可能性もあるこ
とがわかりました。もちろん
逆にそのようなトラブルが自
分にも起きる可能性もあり
ます。だからこそ上を目指す
ためには、普段から準備を怠
らずベストを尽くして競技に
臨むことがとても重要だと思
いました。

今回のネーションズカップは、
1日目：3人馬のグランプリの
順位と、2日目：2人馬のグ
ランプリスペシャル、1人馬
のグランプリ自由演技の順位
を合計して、その数字が小さ
い順に上位というルールでし
た。実は、北原選手とウラカ
ンは跛行のリスクを背負って
2日目のグランプリスペシャル
に出場してくれました。オリ
ンピック代表選考のために必
要なのはグランプリの成績の
みでした。しかし、ここで日
本チームがリタイアすれば東
京オリンピックに向けて良い
印象を与えることはできな
かったでしょう。それを承知
していたからこそ、北原選手
はネーションズカップに参戦
することを決めてくれました。
このような勇気ある決断や団
体を背負って出場している責
任感から来るチームスピリ
ットのおかげで、今回の結果
が生まれました。6位という
入賞でも何でも

ない結果ですが、今後日本
が強くなっていくためには、
このような小さな積み重ね
が今の馬場馬術チームには
必要です。このような選手
の集団であるチーム作りの
ためにも、今後もいろいろ
な形で携わっていければと
思います。



▲ネーションズカップ参加でチームスピリットが向上
北原選手、林選手は私とLudwigの表彰式まで
残って見に来てくれた